



—東地中海地域ニュース—

イラン情勢(30) : モンタゼリー師葬儀とアーシュラーに伴う大規模抗議行動

研究員 山崎 和美

2009年12月27日は、シーア派にとって最も重要な「アーシュラー」であった。第3代イマーム、フセインの殉教日で、ムハッラム月（イスラーム暦第1月）10日に相当する。この日に向けて例年、ムハッラム月に入ると連日追悼集会が開催される。

折しも、アーシュラー1週間前の2009年12月20日、シーア派の最高権威である改革派のモンタゼリー師が聖地コム（メッカ）の自宅で亡くなった。人々の尊敬を集めてきたモンタゼリー師は、保守強硬派のアフマディーネジャード大統領や最高指導者ハーメネイ師の手法を厳しく批判してきた人物である。モンタゼリー師の葬儀とアーシュラーにおける追悼集会が一体化することで、民衆の熱狂がより増幅し情勢を大きく転換させることが予想され、予断を許さない状況にあった。

モンタゼリー師の葬儀と衝突

年末年始にかけて、上記の懸念は現実のものとなった。コムで21日に実施されたモンタゼリー師の葬儀には数万から数十万人が参加したといわれる。葬儀が反政府デモに発展することを恐れた治安当局が厳重な警戒を敷いたため、一部で衝突も起こった。23日には中部の都市エスファハーンで同師の追悼集会が行われたが、参加者がムーサヴィー元首相支持のスローガンを連呼し、催涙弾を発射する警官隊と衝突した。改革派ウェブサイトによると、少なくとも50人が拘束され、多数が負傷した。北部の町ザンジャーンでも24日、モンタゼリー師を追悼するために集まった民衆と警官隊が衝突し、逮捕者や負傷者が出た。

アーシュラーの前日である12月26日にも反体制派のデモがあり、警官隊と衝突した。テヘラン市中心部のイマーム・フセイン広場に数百人が集結しようとした所、バイクに乗った治安部隊がデモ参加者を攻撃し、少なくとも3人が負傷、2人が拘束された。同日夜にも保守派の支持者数十人がモスクで開かれていた改革派の集会に乱入して改革派指導者ハータミ前大統領の演説を中止に追い込んだ。

アーシュラーにおける大規模抗議デモ

12月27日、アーシュラーにあわせて実施されたテヘラン中心部での反体制派の抗議デモには、数千人が集結したといわれる。イラン警察は300人以上の身柄を拘束し5人の死者が出たことを明らかにしたが、少なくともテヘランで4人、北西部タブリーズで4人が死亡し、計8人（最高安全保障委員会の声明による人数。一部報道では9人）の犠牲者が出たことが判明した。犠牲者の中にはムーサヴィー元首相の甥（20）が含まれている。群集の中で偶然犠牲になったとは考えにくく、自宅前で射殺されたとの情報もあ

る。

6月に多数の犠牲者を出した後、7月末以降は沈静化していた大規模な抗議行動であったが、その後も、ゴドスの日（9/18）、米大使館占拠事件記念日（11/4）、学生の日（12/7）などの大規模な抗議行動を中心に、各地の大学で学生を中心とした活動が断続的に行われてきていた。しかしながら、モンタゼリー師の葬儀とアーシュラーの追悼行事が一体となったことで、抗議運動は変質してきたといえる。

抗議行動の変質

イラン当局は大量の治安部隊を投入し、デモの計画段階から多数の関係者を逮捕するなど強硬姿勢を強めた。こうした姿勢への市民の反発が強まり、一部参加者の実力行使に繋がったと見られる。参加者たちは「独裁者に死を」などのスローガンを叫んだが、アフマディーネジャード大統領だけでなく最高指導者ハーメネイ師を批判する声も多くなってきている。若者たちが傷つけられることに抗議する保守的な服装をした年配の女性たちの姿が目立つようになった。治安部隊が警棒で追いかけたり、催涙弾を打つなどした後、群集に向けて発砲したため、これまで平和的なデモに努めてきた市民たちも一部で実力行使に出るなど過激化した。

2009年6月の大統領選挙直後、当局による武力鎮圧で70人以上（政府発表は36人）が死亡したとされる。武力鎮圧により大規模な抗議運動が沈静化した後も散発的にデモが起こっていたが、今回のように多数の死者は出ていなかった。モンタゼリー師の葬儀とアーシュラーの際には、タブリーズ、エスファハーン、シーラーズ、ナジャフアーバードなどでも衝突が生じた。このように人々の抗議の声はテヘランのみならず、イラン各地に波及したが、選挙から半年を経て新たに多数の犠牲者が出たことにより、改革派の反発は一層強まると考えられる。

政府の改革派締めつけと対外強硬姿勢の強化

一方でイラン政府による改革派に対する締めつけはより強化され、政府の対外強硬姿勢もますます強まっている。抗議運動に関し外国の報道機関による直接取材は禁じられており、テヘランでは28日、携帯電話のテキストメッセージも不通となった。

ムーサヴィー元首相のアカデミー・オブ・アーツ最高責任者職解任（12/22）を皮切りに、司法当局は改革派有力者を相次いで逮捕した。28日、治安当局は、改革派の事務所などを急襲し、ハータミー前大統領とムーサヴィー元首相の側近や、ムーサヴィー元首相に近いとされる政治組織「イラン自由運動」の人権活動家エブラーヒーム・ヤズディー元外相など、少なくとも10人（改革派の政治家7人、ムーサヴィー元首相の顧問3人）の身柄を拘束した。

2003年にノーベル平和賞を受賞したイランの人権活動家シーリーン・エバーディー弁護士は、妹のヌーシーン・エバーディー教授がイラン情報機関当局により拘束され、自宅の捜索を受けたことを明らかにした。これに関してエバーディー弁護士は「締めつけを強化すればするほどデモ隊の意思は強まる」として当局の対応を批判した。

改革派ウェブサイトによると、28日ムーサヴィー元首相の甥に弔意を表するため集まっていた改革派支持者に向けて、警察が催涙ガスを噴射した。イラン政府は同日、ムー

サヴィー元首相の甥アリー・ムーサヴィー氏の遺体を収容したことを明らかにした。政府は「死因究明のため」としているが、アリー氏の葬儀や追悼行事を通じて改革派の運動が再燃するのを恐れたためとの見方もあり、市民からは強い反発の声が上がっている。「殉教者のおじ」となったムーサヴィー氏が反政府勢力のシンボルとして存在感をさらに高めることを警戒した当局が、締めつけ強化に乗り出したと見る報道もある。最高指導者ハーメネーイ師は 29 日、野党指導者らは「神の敵」であり、シャリーア（イスラーム法）に基づいて処刑されるべきとの考えを明らかにした。

イラン政府は同日夜、国営テレビを通じ、反政府デモで一部の市民が起こした暴力や破壊行為を厳しく非難し、各職場などに向けて官製デモに参加するよう呼びかけた。これを受けて 30 日には、マシュハドやタブリーズなどで保守派の市民たちが集まり、イスラーム革命体制の尊重などを叫んだ。参加者は「我々の血をハーメネーイ師に捧げる」など、ハーメネーイ師を称えるスローガンを連呼した。国営メディアによると、政府の支持者たち数万人が集会を開き、抗議運動を扇動したとして改革派指導者への処罰を求めた。保守強硬派のファールス通信は、全国で 100 万人以上が参加したと報道した。数十万人の群集が参加したとの報道もある。

改革派の動向と海外の反応

上記のように政府による締めつけが厳しさを増しているにもかかわらず、ムーサヴィー元首相は 2010 年 1 月 1 日、「殉教者の 1 人になる用意がある」と宣言し、抗議運動を今後も継続する覚悟を示した。学生たちによる反政府デモへの弾圧を強めるイラン政府に対し、テヘラン大学工学部の教授 88 人は 4 日、ハーメネーイ師に対し、学生への弾圧停止を求める公開書簡を改革派のウェブサイトに掲載した。最高指導者に対する名指しの抗議は極めて異例である。

西側諸国もイラン政府による抗議行動の弾圧を非難した。欧州連合（EU、加盟 27 カ国）の議長国スウェーデンは 12 月 28 日、イラン当局によるデモ隊弾圧を非難する声明を出した。声明は「デモ隊への武力行使や拘束は基本的人権の重大な侵害」としている。オバマ米大統領は 28 日、テレビを通じて発表した声明で、イラン政府が民間人に「暴力的で不当な弾圧」を加えていると強く非難し、抗議運動で拘束された活動家たちを直ちに釈放するようイラン政府に要求した。

しかしながらこうした米大統領の批判に対して、アフマディーネジャード大統領は「反政府デモはシオニスト（ユダヤ民族主義者）や米国などにより仕組まれたもの」と反論した。モスレヒー情報相は 1 月 4 日、国営テレビに対し、アーシュラーの期間中に実施された反体制派のデモにおいて数人の外国人を拘束したことを明らかにした。同相は「イランに対する心理戦を主導していた」と非難しており、訴追される可能性がある。情報省は、同国に対し敵対姿勢を取っているとして米英などの 60 団体を名指しし、こうした団体や外国大使館、外国人との関わりを避けるよう促した。このように、海外からの非難を受けて、イラン政府は対外強硬姿勢をますます強めている。

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799